

# 『サマーキセラ』 矮性丸莢いんげん = 品種特性を生かした栽培体系 =

雪印種苗(株) 千葉研究農場

近 江 公

## 1 はじめに

さやいんげんの産地は、どこも生産者の高齢化に伴う作付面積の減少、出荷量の減少が共通の問題となっており、今後いかに生産量を確保していくか、大きな課題を抱えています(表1)。

さやいんげんの栽培にあたって、最も時間、労力を要する作業が収穫から選別、箱詰めの出荷作業で、生産者の減少を一戸当たりの面積規模拡大でカバーすることが、大変困難な状況にあります。

一方、市場サイドでは何とか供給量を確保しようと、一部青果での海外からの輸入をおこなったり、また、価格もバブル期ほどの異常な高値がつかなくなったものの、依然高値安定で堅調な動きを示しており、各産地へ盛んに生産の拡大を働きかけています。

当社販売品種のベストクロープキセラおよびサマーキセラは、他品種と比較して細身で品質に優れる特徴がはっきりしており、関西市場を中心に高い評価をいただき、今や関西市場の代表的な品種として利用いただいております。市場ではベストクロープをできるだけ周年で販売しようと、各産地でのいろいろな作型を組み合わせしており、特に品薄感の強い夏場出しとして、サマーキセラが注目されています。しかし、本来比較的冷涼な気候を好むいんげんにとって、日本の夏の気候は極めて過酷な厳しい環境となっており、実際栽培の中でも多くの課題が残されております。ここでは、サマーキセラの品種特性を生かし、より安定した収益性を確保するための栽培体系と、その栽培のポイントについてご紹介致します。

表1 さやいんげんの作付および収穫、出荷量の推移

	作付面積		収穫量		出荷量	
	(ha)	(対比*)	(t)	(対比*)	(t)	(対比*)
平成元年	11,900	100	95,300	100	60,200	100
2年	11,800	99	90,300	95	56,200	93
3年	11,300	95	82,400	86	50,700	84
4年	10,900	92	83,600	88	51,400	85
5年	10,500	88	74,800	78	46,600	77
6年	10,200	86	75,100	79	45,900	76
7年	9,870	83	75,200	79	46,500	77

\*: 各対比は平成元年を100とした時の数値

(資料: 農林水産省野菜生産出荷統計より)



写真1 ハウスでは被覆なしで栽培

## 2 出荷のねらい目

大阪市場における、さやいんげんの入荷量および単価の月別推移は表2のとおりで、産地ごとに見ると冬の沖縄、海外(他の産地での加温栽培もあり)、春秋の九州、四国、近畿、夏の北海道、高冷地となっており、単価では3月が最も高く、6月が最も安くなっています。また、昨年場合は、夏から秋にかけての天候不順で、いんげんにも影響が出て、本来露地抑制栽培の出荷の中心となる、10月出荷の数量が極端に少なく、平年より単価はかなり上昇しました。このようにハウス(写真1)

表2 大阪市場におけるさやいんげんの入荷量および価格の月別推移

(平成9年)

	年合計			1月		2月		3月		4月		5月		
	数量 (t)	単価 (円/kg)	占有率 (%)	数量 (t)	単価 (円/kg)	数量 (t)	単価 (円/kg)	数量 (t)	単価 (円/kg)	数量 (t)	単価 (円/kg)	数量 (t)	単価 (円/kg)	
全体	1,980	920	100.0	106	1,092	106	1,060	128	1,159	150	1,120	203	874	
熊本	276	1,213	13.9	6	1,631	6	1,709	11	1,774	37	1,402	63	1,141	
北海道	276	1,177	13.9											
高知	275	1,027	13.9	28	1,219	34	1,137	37	1,288	27	1,173	37	852	
鹿児島	222	830	11.2	13	888	7	959	14	1,090	42	975	31	695	
沖縄	152	974	7.7	27	1,002	22	1,035	25	1,078	28	993	4	730	
和歌山	94	643	4.7	0	1,115	0	913	0	1,209	3	1,070	15	758	
徳島	94	579	4.7	0	380	0	939	0	842	0	979	2	762	
香川	69	583	3.5			0	1,479			0	905	37	650	
奈良	67	440	3.4									0	562	
オーマン	61	764	3.1	11	854	17	799	16	685	4	662	0	389	
メキシコ	55	1,115	2.8	16	1,160	12	1,063	19	1,135	3	814			
長崎	53	948	2.7									0	840	
長野	48	841	2.4											
佐賀	48	1,131	2.4	3	1,329	2	1,215	4	1,268	5	1,244	8	1,051	
大阪	44	519	2.2	0	618					0	1,294	3	744	
	6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月	
	数量 (t)	単価 (円/kg)	数量 (t)	単価 (円/kg)	数量 (t)	単価 (円/kg)	数量 (t)	単価 (円/kg)	数量 (t)	単価 (円/kg)	数量 (t)	単価 (円/kg)	数量 (t)	単価 (円/kg)
全体	269	653	211	727	185	899	182	961	183	1,016	129	958	128	933
熊本	64	914	8	665	1	972	8	1,313	38	1,345	25	1,324	9	1,353
北海道	0	1,557	56	1,297	105	1,085	95	1,151	19	1,453	0	525	0	1,193
高知	44	711	10	595	5	1,103			6	678	16	876	31	1,214
鹿児島	20	550	0	315			0	1,313	30	878	30	880	36	707
沖縄									0	951	20	967	26	821
和歌山	25	503	11	416	3	631	6	650	15	697	13	767	4	749
徳島	16	496	33	502	9	510	14	657	14	742	4	718	0	442
香川	27	516	2	260	0	463	0	625	1	631	1	459		
奈良	10	263	22	352	14	525	13	570	7	553	1	298	0	845
オーマン											1	751	13	774
メキシコ													4	1,230
長崎	11	753	1	617	0	1,383	4	1,066	26	1,099	9	830	1	381
長野	0	535	19	843	15	812	12	823	2	1,133				
佐賀	9	853	1	712			0	2,008	7	1,157	5	1,265	3	1,435
大阪	14	390	7	341	5	540	8	684	6	676	1	561	0	807

(資料：大阪流通情報協会青果物流通年報より)

およびトンネル栽培等では、比較的気候による影響が少なくすむのに対し、露地栽培は気温および降雨量等の影響が、そのまま収量に大きく左右し、特に抑制栽培では台風の時節と重なるため、最も年次変動の大きい傾向にあります。例年でいけば、春播き露地の出荷の中心となる6月の底値から、夏場は数量が減少するため単価が再度上昇し、夏播き露地抑制が出回る10月に再び値が下がり、その後冬場に向け上がる曲線が平年の単価の動きとなっています。

このような販売単価の動きの中、高温期においても、さやの品質に優れるサマーキセラを導入することによって、特に西南暖地での、夏播き露地抑制栽培(写真2)の前進化が可能となり、収穫

作業の分散化が図れます。通常の露地抑制栽培では10月中旬頃からの収穫となりますが、サマーキセラを用い9月中旬からの収穫を目指します。

### 3 サマーキセラの適地域、適作型 (写真3, 図1)

サマーキセラの主要な品種特性は、キセラ同様極めて細身なさやで、濃緑で曲がり少なく、さや揃いが良く、さやの品質における市場評価が抜群に高いことと、着莢数が多く比較的集中して開花するため、短期収穫で多収となることがあげられますが、キセラとの大きな違いは、キセラより耐暑性に優れ、高温によるさやの奇形がほとんどなく、本来秀品率が低下する夏期間においても、品



写真2 露地栽培の開花最盛期



写真3  
サマーキセラ

質の良いさを収穫できることです(写真4)。このため、サマーキセラの特性を十分発揮させるためには、地域による適作型をしっかりと守る必要があります。各産地における播種時期は以下のとおりです。

- ①西南暖地（関西以西平坦地）  
播種期：7月25日～8月15日  
収穫期（開始）：9月20日～10月10日
- ②西南暖地（関西以西準高冷地）  
播種期：7月20日～8月10日  
収穫期（開始）：9月15日～10月5日
- ③北海道・高冷地（ハウス、雨除け）  
播種期：5月上旬～6月  
収穫期（開始）：7月中旬～8月
- ④北海道・高冷地（露地マルチ）  
播種期：6月上旬～  
収穫期（開始）：8月上旬～

西南暖地においては、9月中旬からの収穫開始を目標に播種します。これより早い播き付けでは、いんげんの生育適温を超え、順調な生育が期待できないので、無理な早播きは避けなければなりません。また、8月中旬以降の播種（10月中旬から

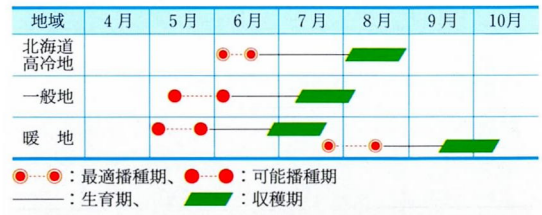


図1 「サマーキセラ」の適応地域および適作型

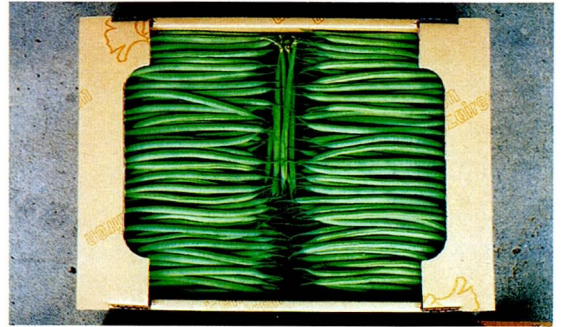


写真4 サマーキセラの出荷品

の収穫開始)であれば、キセラのほうが草勢が強く栽培しやすく、収量も確保しやすいので品種はキセラに切り替えます。

一方、北海道・高冷地においては、夏場の高温が懸念されるハウス（雨除け含む）栽培での、5月上旬から6月播種で、サマーキセラの特性が発揮されます。また、露地栽培においては、5月中の播種は低温期でも比較的生育旺盛なキセラを用い、サマーキセラは6月に入って、十分温度が確保された時期から播種します。（なお、北海道の栽培については、本年3月号により詳細にまとめてありますのでご参照下さい。）

#### 4 栽培のポイント・注意点

さやいんげんの生育適温は20～25℃前後で、30℃以上の高温では、生育が抑制されて草勢が確保しにくく、結果的に着莢が少なく低収となったり、また、開花期以降の高温では受精障害による奇形莢（いわゆるぶくれ莢）や、曲がりさやの発生が多く、特に西南暖地の夏取りにおいては、さやの品質が極めて不安定となります。サマーキセラは比較的耐暑性に優れ、夏での栽培が可能との紹介をさせていただいておりますが、あくまでも品種レベルでの程度差であり、基本的には作物として暑さに対して限界がある中で、極めて厳しい環境

の中での栽培となるので、栽培上暑さ対策は大変重要となってきます。

### 1) 圃場準備から播種までの留意事項

夏場の高温期での播種となり、発芽は極めて不安定で、また、発芽後の立ち枯れの心配も懸念されます。圃場の選定にあたっては特に乾燥、過湿にならないような灌水施設が利用でき、かつ排水の良い場所を選びます。また、さやいんげんも基本的には連作をきらう作物ですから、できるだけ他作物と組み合わせながら作付けします。土壤伝染性の病害による立ち枯れの恐れがある場合は、必ず土壤消毒をおこない、十分ガス抜きした上で圃場の準備に入ります。原則としてマルチ栽培をおこない、地温の上昇を防ぐ上で白黒ダブルマルチや、アブラムシ等の害虫防除も必要な場合は、シルバーマルチを利用します。

露地栽培では、播種後の降雨によって種子が腐敗したり、生長点が止まった状態で異常発芽したりすることが多く、特に夏播きの場合は移植栽培が一般的です。また、播種するにあたっては、必ず種子に殺菌剤を粉衣し発芽不良を防ぎます。殺菌剤はオーソサイド、または、チウラム剤を使用します。

### 2) 生育期間中の留意事項

サマーキセラは、ベストクroppキセラよりさらに草丈が低く、草勢がややおとなしくコンパクトにまとまるタイプなので、生育期間を通してできるだけ草勢を確保する必要があります。特に生育中の乾燥は節間が詰まり草丈が伸びず、結果的に草勢が弱い状態で開花を迎え、その後の着莢も少なく低収となり、秀品率も低下することにつながっていくので、まずは草勢確保のため乾燥させないように注意が必要です。

灌水するにあたっては、根腐れを起こさせないように長時間の大量灌水は避け、できるだけ土壤水分が一定に保てるよう、短時間での細めな灌水が大切です。また、灌水と合わせ、生育後半からは肥料切れしないよう追肥をおこないます。さやいんげんの場合、特に着蕾期から開花初期にかけて、急激に肥料を吸い上げ始めるので、タイミングを失わないよう注意します。

### 3) 収穫期間中の留意事項

サマーキセラは前述したとおり、やや集中して

開花してくるため、中生品種の中では収穫ピークの山が比較的大きく、ピーク時にはやや収穫に追われやすく、取り遅れに注意が必要です。さやが極めて細く、また太りも遅いので、外観上は多少の取り遅れもそれほど品質の劣化が目立ってきませんが、市場出荷後の日持ちや色あせ、退色など取り遅れによる劣化が発生する恐れがあります。また、果柄部分が硬くなって莢離れがしにくくなるのも、取り遅れによる場合が多く、作業効率の面からも適期収穫を心がける必要があります。

さやいんげんも他の野菜同様、外観、食味とともに鮮度が極めて重要です。暑い時期の収穫で、作業する人も大変ですが、同様にさやいんげんも収穫直後から水分が抜けていき、鮮度の落ちが極めて早い時期ですので、予冷等の鮮度保持にも十分気を付け、各作業の時間帯についても注意が必要です。

## 5 おわりに

サマーキセラの特性は、ベストクroppキセラでは、さやの奇形が発生しやすい夏の暑い時期に、比較的良好なさやが収穫できるといった、極めて明確な特徴を持った品種です。ただし、さやいんげんの栽培環境としては、かなり厳しい条件下での栽培が多く、品種特性を十分発揮させる以前の問題として、まずは暑さ対策をしっかり栽培方法に取り組む必要があります。その上で初めてサマーキセラの特性が生きてきます。また、サマーキセラは基本的に長期収穫には不向きです。草勢の強さからいっても、西南暖地での10月中旬以降の収穫では、キセラのほうがより収量性が高く、品質も安定します。サマーキセラは、あくまでも夏場収穫用のショートリリーフ役として、十分その特性が発揮されます。

さやいんげんの産地が、どこも共通してかかえている生産量の減少を、サマーキセラのような特徴を持った品種を用い、今まであまり栽培されていない、新規作型に組み入れることによって、作業量を集中させず、さらに出荷期間を延長し、総体重を維持、拡大できれば、今後のさやいんげんの産地の取り組みの一つとして、おおいに意義あることと確信しております。